

# 古典文学教育の問題点―和歌教材における掛詞の認定を中心に

渦 卷 恵

## 一 はじめに

二〇一八年三月、文部科学省による学校教育法施行規則の一部改正と、高等学校学習指導要領の改訂が行われた。新高等学校学習指導要領等は二〇二二年度から年次進行で実施される。

今回の改訂では、共通必修科目として「現代の国語」及び「言語文化」が、選択科目として「論理国語」「文学国語」「国語表現」及び「古典探究」が新設された。

共通必修科目「現代の国語」は、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置いた科目として位置付けられるのに対し、「言語文化」は、上代から近現代につながる言語文化への理解を深める科目として、「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」を中心とし、「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に

育成することをねらいとする。

選択科目「古典探究」は、古典を主体的に読み深めることを通じて自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目として、主に古文・漢文を教材に「伝統的な言語文化に関する理解」を深めることを重視し、「思考力・判断力・表現力等」を育成することもあわせて目標とする。

古典文学教育は「言語文化」「古典探究」の科目の中で実施されることとなるが、「伝統的な言語文化に関する理解」を深めるほか、さらに「思考力・判断力・表現力等」を培うような取り組みが必要になる。すなわち、古典文法を習得したうえで、古文の現代語訳をするという従来行われてきた授業方法でなく、考え、自ら判断し、表現力をつけることが期待されているため、教材の選択も難しくなろう。

古典と近・現代をつなぐ教材として、説話集に採話した芥

川龍之介の作品や、近世の思想家の文章なども指導要領の改定意図に添うものだろうが、本稿では和歌に注目したい。和歌は古典から近・現代にわたり詠み続けられた韻文形式であり、連歌や俳句などの新形式を生み、五七五のリズムは現代の標語や歌謡曲にも用いられている。和歌を学ぶことで、日本語・日本文学の理解を深めると同時に、古くから受け継がれてきた日本独自の美意識に触れ、表現力を養うことができるのではないだろうか。また、掛詞の語法は現代の駄洒落のルーツであり、ひらがなで書かれるからこそ生じる二重の意味を発見し、両義性を楽しむことは、表現力の向上に有効だと考えられる。

そこで、本稿では改めて和歌の技法である掛詞の定義を確認し、その問題点を整理して、古典文学教育における教材研究としたい。

## 二、掛詞の性質——義性、二つの文脈

時枝誠記『国語学原論』<sup>①</sup>は、掛詞を具象と抽象の二想の組み合わせであると定義し、掛詞を契機として展開した上接の句は主想に対して附会の関係であると指摘した。例えば、  
むすぶ手のしづくににぐる山の井の飽かでも人に別れぬ  
るかな（古今集・四〇四・貫之）

について、上の句が山の井戸水を汲むという具象であり、表現したいことは「飽かでも」以下の下の句なので、上の句は

附会されたものとなる。「飽く」は辞書的には同じ意味だが、明確な対比をなす掛詞として、具象と抽象の二想をつなげているから、これを掛詞と認定する。

鈴木日出男「古代和歌における心物対応構造——万葉から平安和歌へ」<sup>②</sup>、同「古今集の掛詞をめぐって」<sup>③</sup>には、虚実融和を掛詞の特徴とし、

心には下ゆく水のわかかへり言はで思ふぞ言ふにまされる（古今六帖・二六四八）

のように古今以降、心物が対応する構造の歌が増える中で、序詞が減少し、掛詞が増えることなど、掛詞成立の所以が指摘されている。また、萩野了子「掛詞の表現構造」<sup>④</sup>は、ひらがな表記によって、万葉の譬喩歌の中から掛詞式序詞が発達し、古今集では、譬喩系の文脈と実意系の文脈が同等の力でせり出されると論じる。さらに、神尾暢子「掛詞と周辺——古今和歌集掛詞考序説」<sup>⑤</sup>は、掛詞の用例を表にして、女性歌人のほうが多く使う傾向を示し、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ（古今集・九九四・よみ人知らず）

の場合、当時は「白波」といえば「盗賊」の意が想起されただろうことから、掛詞の認定には時代性も考慮すべきである点を指摘する。

そこで、問題となるのが、個々の用例における掛詞の認定基準である。谷山茂『講座 解釈と文法Ⅰ』<sup>⑥</sup>は、時枝と同じ

く、掛詞を介して二つの内容が連結されることを、「文脈の本義と翻義、上下、表裏。本来全く違うものを結びつけるおもしろさ」と規定する。そのため、

秋霧のともたちいで別れなばはれぬ思ひに恋ひやわた

らん（古今集・三八六・平元規）

でいうと、霧が立つ・自分が出発する、霧が晴れない・心が晴れない、というの、本来全く違う意味というわけではないので、掛詞としない立場をとる。次に、西園欣一「懸詞研究―懸詞の概念―」<sup>(7)</sup>では、掛詞とは「共通の語声によって意義を異にする二つ、或いは三つの意義の存在を把握することができることばである」とし、谷山と同じく広義の掛詞は認めない立場をとる。森朝男「短歌的修辭の基礎構造―上下句の双文と連接と」<sup>(8)</sup>は、掛詞を用いた歌が二系対比構造をしており、上下句の並立から連続一行の直列構造となると分析する。

一方で、柿本奨「掛詞のかたち―後撰集を中心に―」<sup>(9)</sup>は、くれなるのいろには出でじ隠れ沼のしたにかよひて恋ひは死ぬとも（古今集六六一）

のやうな歌で枕詞「くれなるの」「隠れ沼の」のかかり方を説明しようとすれば、「いろ」「した」が掛詞であることに触れざるを得ないだらう。このやうな同一異義における意識的な自然の意味と人事の意味との対比、物質の意味と精神的意味との対比などは、後撰集では、浅し、

薄し、掛く、消ゆ、塞く、絶ゆ、付く、解く、靡く、隔つ、乱る、晴る、渡るなどの用法にも見受けられる。この対比意識の有無が掛詞と縁語とを区別するゆゑにもなるだらう。

と、辞書的な意味が同じであっても、対比的に用いられていれば、掛詞として認めていく立場をとる。藤平春男「短歌的文脈」<sup>(10)</sup>は、先にあげた、

むすぶ手のしづくににぐる山の井の飽かでも人に別れぬ  
るかな（古今集・四〇四・貫之）

には

浅香山かけさへみゆる山の井の浅くも人を思うふものか  
は（古今六帖・九八五）

から「浅し」のイメージが含まれているというように、掛詞の含み持つ重層的な意味にも注意して、文脈を意識し解釈する重要性が論じられている。

平野由紀子「古今和歌集表現論―要としての共通音声」<sup>(11)</sup>は、掛詞を要（蝶番）として自然の想と人事の想が結びつくことを、また、「仁明朝の和風文化と六歌仙―掛詞・物名・竹取物語」<sup>(12)</sup>では、二義の対立こそ掛詞の本質であると論じる。さらに「古今和歌集―二つの文脈―」<sup>(13)</sup>において、掛詞が人事を詠む際に自然の事象を用いて二重の文脈を形成することを確認したうえで、

ひとり寝る床は草葉にあらねども秋くる宵は露けかりけ

り(古今集・一八八・よみ人知らず)

を例に、注(1)論文を引用して次のように論じる。

これを用いて今説明するなら、次のようになる。この古今集の歌の「露けし」という言葉は辞書では(1)露が多い(2)涙っぽい、とある。心情の意味は、立項された「露けし」の中に(1)(2)など下位分類として説明されているのが普通である。つまり、辞書で別項目となるような異語ではない。で、これは掛詞とみない研究者が多い。しかし時枝説では、「共通音声によって喚起せられる二つの概念には、明瞭な対比が意識せられている。」(五三〇ページ)という。つまり共通音声「ツユケシ」によって喚起される二つの概念には、自然の露的意味と、悲しい意味の「露けし」の意味の明確な対比がある。掛詞なのだと認定している。人事的な意味と、自然のものに対しての意味とが対比されて「露けかりけり」も掛詞であると認定するのが時枝説である。私もこの立場である。……「薄し」といった場合に、「夏の衣が薄い、衣が透き通って薄い」という意味と、「人に対する愛情が薄い」というのとを対比させて使う。こういうときにもやはり「薄し」という言葉が掛詞になっていると見た方がいい。

つまり、和歌が、共通音声による語を要にして二つの文脈を形成する時に、その要となる語が、辞書的に一つの項目に

入るものであって、全く違うものを結び付けたというものでなくとも、それを掛詞とすると改めて定義づけただのである。

例えば、

春霞たなびく山のさくら花見れども飽かぬ君にもあるか

な(古今集・六八四・友則)

の「見れども飽かぬ」も自然と人事をつなげる共通音声なので、掛詞とする。

平野論文以降、掛詞を新たに定義し直す論文は管見に入らない。二〇一五年に刊行された小田勝『実例詳解 古典文法総覧』においても、

かるかやの乱るる野辺を分け行けば袖ただならぬ朝ぼら

けかな(源重之女集・四八)

の「ただならぬ」を掛詞とする。辞書的に同じ意味でもその両義性を認めるからであろう。

以上、掛詞について研究史をもとにまとめると、

辞書的な意味が同じであっても、二つの文脈を読みとれる場合は、掛詞(共通音声部分・広義の掛詞)として解する。

ということになるだろう。

### 三 掛詞認定の揺れ

ところが、そういった掛詞認定に関する論は、古典文学教育の場では議論されていないように思われる。そこで、公的

な図書館や高校等の図書室で閲覧できる和歌の注釈書がどのようにに注するか、「泣く・鳴く」「乱る」「惑ひ」「深し」を例に、主に古今集の歌を参照しながら考察していきたい。参考とした注釈書は次の通りである。

小島憲之・新井栄蔵 新日本古典文学大系（岩波書店 一九八九年）以下、新大系と略す

小沢正夫・松田成穂 新編日本古典文学全集（小学館 一九九四年）以下、新全集と略す

奥村恒哉 新潮日本古典集成（新潮社 一九七八年）以下、集成と略す

小町谷照彦 ちくま学芸文庫（筑摩書房 二〇一〇年）以下、ちくまと略す

高田祐彦 角川ソフィア文庫（角川学芸出版 二〇〇九年）以下、ソフィアと略す

「泣く・鳴く」

① 思ひいでて恋しき時は初雁のなきてわたると人知るらめ

や（古今集・七三五・大伴黒主）

この歌については、

……初雁の鳴きてわたると人知るらめ

や（自然）

思ひいでて恋しき時は……泣きてわたると人知るらめ

や（人事）

のように、秋に飛来する雁が鳴くことと、恋の思いのために自分が泣くことを重ねており、自然と人事の二つの文脈が詠まれている。「なき」が二重の意味をもたないと「初雁の」の五文字は不要なのであり、「なき」は「鳴き」と「泣き」の掛詞ということになる。

しかし、注釈書では、次のように見解が分かれる。

指摘ナシ（新大系）

雁が空を鳴いて飛ぶことと、作者が恋人の家付近を泣いて歩くことを言いかける（新全集）

「初雁の」は「泣きてわたる」の枕詞（集成・ちくま）

初雁が「鳴いて渡る」と、私が「泣いて出かける」との

両義（ソフィア）

新全集が「言いかける」とし、ソフィアは「両義」とするばかりで、明確に掛詞と指摘するものはない。

② 野とならばうづらとなきて年は経むかりにだにやは君か来ざらむ（古今集・九七二・よみ人知らず）

この歌も、

野とならば鶉と鳴きて年は経む狩りにだにやは君か来ざらむ（自然）

らむ（自然）

……憂辛と泣きて年は経む仮にだにやは君か来ざらむ（人事）

らむ（人事）

と、自然と人事の二つの文脈を形成する。ところが「なく」に関して、明確に掛詞とする指摘はない（新大系・新全集・

集成・ちくま・ソフィア)。新全集の現代語訳に、「鳴(泣)きながら」とあるばかりである。

「鶉となって鳴いて」とあるので「鳴く」のは鶉である。一方「憂辛」といって泣くのは自分ということになり、「なく」は掛詞になるはずである。

ただ、「鶉と鳴きて」の助詞「と」をどう扱うかが難しい。鶉として鳴いて、「憂辛」といって泣いて、のように「と」に別の働きを持たせなければ訳せないことになる。

我のみや世うぐひすとなきわびむ人の心の花と取りなば

(古今集・七九八・よみ人知らず)

も同様の例。

さらに、「泣く」「鳴く」が明確に区別されていたかどうかという疑問もある。たとえば、

雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ  
(古今集・四・藤原高子)

なきわたるかりの涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露  
(古今集・三二二・よみ人知らず)

は、鳥の涙を詠む。鳥が涙を流すということは、擬人法というより、そもそも「なく」を動物、人間で区別して意識していなかった可能性がある。

ともかく、新全集が、「鳴(泣)きながら」と訳しながら、①のように「言いかける」と注しないのは不統一の感を否めないだろう。

「乱る」

③ かり菰の思ひ乱れてわれ恋ふとも知るらめや人し告げ

ずは(古今集・四八五・よみ人知らず)

歌の構造は次のようになる。

かり菰の……乱れて……(自然)

……思ひ乱れてわれ恋ふとも知るらめや人し告げ

ずは(人事)

初句「かり菰の」についての諸注は次の通り。

「乱る」を出す表現(新大系)

「乱れ」の枕詞(新全集・集成)

「思ひ乱れて」の枕詞(ちくま・ソフィア)

自然と人事の対比であることに留意すると、「乱れ」は菰が乱れることと、私が思い乱れることの掛詞と言うことになる。しかし、諸注はこれを掛詞とはしない。

④ 忘らるる時しなれば葦鶴の思ひ乱れてねをのみぞなく

(古今集・五一四・よみ人知らず)

……葦鶴の……乱れてねをのみぞ鳴く

(自然)

忘らるる時しなれば……思ひ乱れてねをのみぞ泣く

(人事)

この歌も③と同様に「思ひ乱れて」を要に自然と人事を詠むが、諸注の理解はやや異なる。

鶴の状態とわが身の状態を掛ける（新大系）

「葦鶴の」は「音をなく」の枕詞（新全集）

「葦鶴の」は四・五句を導く枕詞（集成）

「葦鶴の」は「思ひ乱れ」「なく」を枕詞的に導く（ちくま）

鶴が「乱れ飛ぶ」を掛ける。「鳴く」と「泣く」を掛ける（ソフィア）

自然と人事の二つの文脈を形成しているとすると、「思ひ乱れ」の「乱れ」は掛詞ということになる。

⑤ 沖へにもよらぬ玉藻の波の上に乱れてのみや恋ひ渡りなむ（古今集・五三二・よみ人知らず）

沖へにもよらぬ玉藻の波の上に乱れて……（自然）  
……乱れてのみや恋ひ渡りなむ（人事）

諸注は、次のように見解が分かれる。

藻の乱れるの意と心の乱れるの意を掛ける（新大系）

三句まで序詞（新全集・集成・ちくま）

「乱れ」についての指摘ナシ（ソフィア）

よみ人知らず歌で万葉調の詠みぶりであるため、掛詞でなく序詞に分類すべきかもしれないが、新大系は「掛ける」と注している。

「惑ひ」

⑥ 宵の間もはかなく見ゆる夏虫に惑ひまされるこひもする

かな（古今集・五六一・紀友則）

宵の間もはかなく見ゆる夏虫……惑ひ……（自然）

……夏虫に惑ひまされるこひもするかな（人事）

諸注は次の通り。  
指摘ナシ（新大系）

夏虫が灯火に慕い寄ることを、恋の迷いと同様なものとみたのである（新全集）

指摘ナシ（集成・ちくま）  
あちらこちらに飛ぶ蛾の様子と、恋の惑乱と両方の意味。「夏虫」からの連想で、「火」が掛かるか（ソフィア）

宵に惑いながら飛ぶ夏虫に、まして惑いがまざる、というので、「惑ひ」は二つの文脈をつなぐ共通音声ということになる。「よひ」「まどひ」「こひ」と「ひ」が重ねられ、ソフィアのように「火」が掛かっているとすると、技巧の勝った歌ということになるう。

「深し」

⑦ かれはてむのちをば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな（古今集・六八六・躬恒）

枯れはてむのちをば知らで夏草の深く……（自然）  
離れはてむのちをば知らで……深くも人の思ほゆるか

な(人事)

諸注とも、「枯れ」に「離れ」を掛ける点は同じ。「深く」については次の通り。

「深く」の指摘ナシ(新大系)

(夏草のは)「深く」の枕詞(新全集)

第三句まで序詞。夏草がうっそうと繁るところから、

「ふかくも」を起す(集成)

「夏草の」は「深く」の枕詞(ちくま)

夏草の様子と自分の思い(ソフィア)

新大系は、二句目の「知らで」について「知覚しないでの意と関心を持たないでの意を掛ける」とある点<sup>4</sup>が留意される。この歌については、二つの文脈を意識し、その文脈の中で辞書の下の意味を用いる場合についても「掛ける」とするのである。

また、古今集以外にも、次のように詠まれた例がある。

⑧ おほあらしのもりの下草茂りあひて深くも夏のなりにけるかな(寛平御時中宮歌合・一一・躬恒)

おほあらしのもりの下草茂りあひて深く……(自然)

……深くも夏のなりにけるかな(自然)

この場合は、草が深く繁る意に夏が深まる意を掛ける、自然と人事でなく、自然と自然の文脈の組み合わせである。

以上を整理すると、次のようになる。

・二つの文脈を形成しない歌の場合、要になる語を掛詞とするか、序詞、あるいは枕詞とするかで、注釈書の見解が分かれている。

・「掛詞」と明確に表わさず、「言いかける」「両義」「掛ける」といった表現を用いて説明している。

すなわち、「広義の掛詞」とするか、明確に「掛詞」とせず文脈をつなぐ「共通音声部分」とするか、また、「意を兼ねる」「響かせる」「意を込める」「意を含む」「両義」などといった表現をどのように使い分けるのか、掛詞の定義づけがあいまいであることがわかる。

#### 四、二つの文脈をなさない掛詞の認定

次に、二つの文脈をなさない掛詞の認定について、古今集歌を例に考察していく。

⑨ 唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ(古今集・四一〇・在原業平)

唐衣着つつ穢れにし棲しあれば張るばる着ぬる(度)……

(人事)

……馴れにし妻しあれば遙々 来ぬる旅をしぞ

思ふ(人事)



第四句「来ぬる」と「着ぬる」を（新大系・ソフィア・ちくま）は掛詞とする。ただし、初句に「着つつ」があるので、同語反復になる。ソフィアのみ、五句「たび」について、「度」と「旅」を掛け、次のように訳す。

唐衣、着物を着ては棲（つま）が馴染んだように、長年慣れ親しんだ妻を都に残してきたので、馴染んだ衣は洗い張りをして着た折を思い出しながら、はるばるやって来たこの旅をしみじみと思うのだ。

たしかに類する掛詞の例は次のように見出せる。

夜を寒み置く初霜をはらひつつ草の枕にあまたたび寝ぬ

（古今集・四一六・躬恒）

このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに（古今集・四二〇・道真）

しかし、「唐衣」以下、「衣」に関する縁語を用いる掛詞が連なる中で、「度」だけが縁語関係から外れる。また、「棲しあれば」を承ける語がないので、文脈を成さない。したがって、「たび」を「度」と「旅」の掛詞とすることに於いては異議があるものの、諸注が文脈を成さない掛詞を認定している点は注目されよう。

⑩ 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風や解く

らむ（古今集・二・紀貫之）

解氷を詠む自然詠で、掛詞を要とする文脈は形成されない。

諸注は次の通りである。

むすびし「凍る」「解く」に対する。（新大系）

指摘ナシ（新全集・集成・ちくま）

「とく」は、「袖」「むすび」「立つ（裁つ）」と合わせて、

「帯や紐を」解く」という意味で服飾を連想させる。

「むすぶ」「こほる」の結びつきに対して、「立つ（裁つ）」

「解く」に開放的な春の到来の印象がある」（ソフィア）

この歌に関しては、橋本不美男・久保木哲夫・杉谷寿郎

「古今和歌集技法一覽」<sup>(15)</sup>に、

掛詞 むすび（搦び・結び） 縁語（結ぶ・解く）

とあり、青木恵子「縁語攷―その概念規定に関わる二、三の

問題」<sup>(16)</sup>には、

「袖 結び 張る 裁つ 解く」は縁語

と指摘されている。「袖」に連想される縁語を連ねているのは意図的で、掛詞の面白さを表現しているように思われる。すなわち、文脈を形成しない場合においても、掛詞を認めていくべき好例であろう。

⑪ あはれとも憂しともものを思ふ時などか涙のいとなかる

らむ（古今集・八〇五・よみ人知らず）

第五句「いとなかる」について、「いと流る」「暇なかる」

を掛詞とするかで次の通りに見解が分かれる。

（僻案抄）の「いとなし」の連体形「いとなかる」と

「最(いと)流る」(↓七五三 注いとほれて)を掛ける。  
中世注は「いとなかる」とも示す(新大系)

「糸流る」と「暇(いと)無かる」を言いかける。前者は流れる涙を糸にたとえたもの。後者は涙がいとまなく流れる意。「いと」をたいその意の副詞とみて、涙がたくさん流れるとする解もある(新全集)

「涙の糸流る」(糸を引くような涙が流れる)を掛けている(集成)

いと流る・暇なかる(ちくま)

「暇(いと)なし」の連体形「いとなかる」と「流る」との掛詞。「いと」が「流る」を修飾するという説はとらない(ソフィア)

玉を糸でつなぐ歌の用例は、次のようにある。

ふぢ衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける  
(古今集・八四一・忠岑)

しかし、涙が糸のように流れる例は未見。「涙の糸」は『新全集』の用語検索によると、近松以降の例が見られるのみ。「涙がいとど流れる」はよくある表現なので、副詞の「いと」と「暇」は掛詞として認定していいと思われるが、「糸」は掛詞にならないように思われる。一方、「いと」が「流る」を修飾するという説をとらないとするソフィアの説は、根拠がわからない。

縁語として用いられる掛詞をどこまで認定すべきか、どの

ように表の意に反映させるか、その見極めは難しいものの、文脈をつなぐ共通音声以外にも、両義を持つ掛詞を積極的に見つけていくこともまた、和歌教材ならではの楽しさになるのではないだろうか。

## 五、三重の掛詞の可能性

教材として頻出する次の歌もまた、掛詞の認定については見解が分かれている。

⑫ 花の色はうつりにけりないたづらにわがみよにふるなが

めせしまに(古今集・一一三・小町)

花の色は うつりにけりないたづらに……………よに

降る長雨せしまに(自然)

花の色(容色)はうつりにけりないたづらにわがみよに

経(古)る眺めせしまに(人事)

### ・花の色

作者の容色を掛けるとする説もある。(新大系)

表面は花であるが、裏に作者の容色をさす。(新全集)

「花の色」を作者の容色の比喩と解する説が多いが、根拠がない。容色の比喩なら「雑歌」の部にあるべき内容でもある。ゆえに、ここでは言葉どおり理解せねばならない。(集成)

植物と容色、両方の意味(ちくま・ソフィア)

「花の色」に「容色」の意を重ねてると認めると、自然と人事の二つの文脈が並立するので、掛詞と言うことになる。  
・よに

「この世で」とも「はなはだ」とも解せる。(新全集)

「世」は男女の仲をいう語であるから、この意もあろう  
(窪田章一郎『鑑賞日本古典文学 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集』)

ここで注意されるのは、「世」が辞書の下位の意味、男女の仲と掛けるならば、「はなはだしく」と合わせて三重の掛詞になる点である。

・経る、古る、降る

「経(古)る」と「降る」を掛ける。「わたくしがこの世でもの思いをしながら過している間に、長雨が続いて。」

(新大系)

「世に経る」と考えられたのは『拾遺集』以後だろう。

(新全集)

「ふる」は「経る」と「降る」(集成・ちくま)

「経る(古る)」と「降る」の掛詞。「わが身世にふる」という表現は、めずらしく、普通は、「わが身古る」(七八二)か「世に経る」(九五二)かどちらか。ここは「古る」と「経る」を兼ねるか(ソフィア)

「わが身ふる」とか「世にふる」という表現はあり、ここはその二つを強引に結びつけた表現になっている。：

「ふる」の掛詞としては、「古る」の表現も加えられる  
(安藤宏・高田祐彦・渡部泰明『読解講義 日本文学の表現機構』「多義性」)

ここでは「経る」か「古る」かが問題になる。「ながめせし間」から時間が経つ「経る」とも、

今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり(古今集・七八二・小町)

の歌に詠まれるように「今」との対比を考え「古る」ともとれる。片桐洋一『古今和歌集全評釈』は「経る」を採り、三句以下を、

むなしく我が身がこの世に生きるゆえの物思いをしてば  
んやりとしている間に。

と訳す。「経る」「古る」を別個に考えて「降る」との三重の掛詞とすべきか、「経(古)る」のように、片方に意味が含まれるとして解すべきか、問題が残される。

・ながめ

「物思いにふけることに庭の風景を見つめる意も含まれ、  
「春の長雨」にも言い掛ける(新全集)

新全集説に従うと、「物思い」「眺め」「長雨」の意の三重の掛詞となるか。物思いにふける意の「ながめ」に眺望する意を掛ける例には、

大空は恋しき人の形見かは物思ふごとに眺めらるらむ  
(古今集・七四三・酒井人真)

かきくらししぐるるそらをながめつつ思ひこそやれ神な  
びのもり（拾遺集・二一七・貫之）

などがある。したがって、先にあげた「経る・古る」同様に、  
意を含むと捉えるか、あるいは三重の掛詞と認定すべきか、  
教材として取り上げた場合に、正解が何かわからないことにな  
る。

⑬ 音にのみ菊の白露よるはおきてひるはおもひにあへずけ

ぬべし（古今集・四七〇・素性）

……菊の白露夜は置きて昼は：日（火）にあへず消  
ぬべし（自然）

音にのみ聞く……夜は起きて昼は思ひ にあへず消  
ぬべし（人事）

・おもひ

諸注「思ひ」の「ひ」に「日」を掛けるが、集成は「火」  
を掛詞とする。

「思ひ」に「火」を掛ける。「白露」に対しては「日」  
の意が響かせられている。（集成）

川本皓嗣「二重像の詩学―比喻と対句と掛詞」は、「思ひ」  
の「ひ」に「日」と「火」を三重に掛け、次のように解す。

一方の意味は、「（噂に高い）菊の白露は、夜に置き、昼  
には日に照らされて消えてしまう」。もう一つの意味は、  
「あの人のことは噂に聞くばかり。つらい恋に悩む私は、

夜には起きて思い焦がれ、昼間は胸の火に灼かれて、死  
んでしまえうだ。」

当該歌の「思ひ」に「日」と「火」を掛け三重の掛詞とす  
る場合、「露」の縁語は「置く」「消ぬ」、「火」の縁語は「燠」  
「消ぬ」になり、一首は技法はさらに複雑となるう。

ちなみに、

今朝はしもおきけむ方も知らざりつ思ひ出づるぞ消えて  
かなしき（古今集・六四三・千里）

では、「今朝」「起き」「ひ出づる」とあるので、「思ひ」の  
「ひ」と「日」が掛詞であるとし、「火」を掛けないのが一般  
的である。集成も同じ。ところが、新大系は、

「思ひ」の「日」が出るのに、かえって、「思ひ」の「火」  
が消え入るように悲しいことだ。

と三重に解す。さらに、「思ひ」の掛詞の例として特殊なも  
のに、

耳なしの山のくちなし得てしがな思ひの色の下染めにせ  
む（古今集・一〇二六・よみ人知らず）

がある。これも大系、片桐注（19）は、「思ひ」の「ひ」に  
「火」と「緋」を掛け、すなわち三重の意を掛けて解してい  
る。

⑭ あさなあさな立つ河霧の空にのみうきて思ひのある世な  
りけり（古今集・五一三・よみ人知らず）

あさなあさな立つ河霧の空にのみうきて……(自然)

……空にのみうきて思ひのある世な

りけり(人事)

この歌の四句「うきて」についても見解が分かれる。

「浮き」と「憂き」を掛ける(新大系)

一、二句が三、四句の「そらにうく」の序詞。浮くと憂

くとの掛詞(新全集)

三句まで序詞(集成)

二句までが「空にのみ浮きて」の序詞(ちくま)

うきて 川霧の状態と心の状態。「憂し」が掛かるとい

う説はとらない(ソフィア)

ソフィアは、「憂き」を掛詞とせず、「そら」については、

「中空」と「上の空」を掛けるとする。

「憂き世」を詠んだと考えると、「うきて」の「うき」に「憂き」を掛けてもよいように思う。さらにソフィアの説を重ねると、河霧が空に浮き、自分の心も上の空に浮き、つらい思いのあるこの世であるよ、という意になる。「浮き」について、意味が同じでも文脈が異なる場合に掛詞と認定するのであれば、「霧が浮き、心が浮き、憂き」と、三重の掛詞ということになろう。

古今集ではないが、後拾遺集の次の歌についても三重の掛詞が見出せる。

⑮ 津の国のこやとも人を言ふべきにひまこそなけれ葦の八

重葦(後拾遺集・六九一・和泉式部)

津の国の昆陽(の小屋) ……ひまこそなけれ葦の八

重葦(自然)

……来やとも人を言ふべきにひまこそなけれ…(人

事)

佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈「正集篇」

には「来や」に津の国の地名の「昆陽」をかけ第五句の縁

語として「小屋」の意をもかねてゐる。」とあり、三重の意

味を持たせる。久保田淳・平田喜信『新大系』は、「来や」

「昆陽」を掛詞とするが、訳では「八重葦き的小屋ではあり

ませんが」と、「小屋」に意味を認定する。藤本一恵・講談

社学術文庫も「昆陽」に「来や」「小屋」を掛ける、とする。

津の国の難波わたりに作るなるこやと言はなんゆきて見

るべく(拾遺集・八八五・よみ人知らず)

について、小町谷照彦『新大系』は、「来や」「小屋」に「昆

陽」を響かせる、とあり、明確に三重の掛詞とはしない。

すでに、三重の掛詞については、柿本注(9)論文に次の例が指摘されている。

⑯ 思ひ出づるときは(時は・常葉・常磐)の山の時鳥唐紅

のふり出でてぞ鳴く(古今集・一四八・よみ人知らず)

⑰ ひとりのみながめふる(経・古・降る)屋のつま(端・

夫)なれば人をしのぶ(偲・忍)ぶの草ぞおひける(古今集・七六九・貞登)

18 京に侍りける女子を、いかなる事か侍りけん、心憂しとてとどめおきて、因幡の国へまかりければ、むすめ打ちすてて君しいなば(往なば・稲葉・因幡)の露の身は消えぬばかりぞありとたのむな(後撰集・一三一)

中原の宗興が美濃の国へまかり下り侍りけるに、みちに女の家に宿りて、言ひつきて去りがたくおぼえければ、二三日侍りて、やむごとなき事によりてまかりたちければ、きぬを包みてそれが上に書いて贈り侍りける 中原宗興

19 山里の草葉の露も繁からんみの(蓑・身の・美濃)しろ衣縫はずとも着よ(後撰集・一三五)

甲斐へまかりける人につかはしける

20 君が世はつるのこほりにあえて来ね定めなき世のうたがひ(疑・卵・甲斐)もなく(後撰集・一三四)

女ともだちのもとに、筑紫よりさし櫛を心ざすとて

大江玉淵朝臣女

21 難波瀉何にもあらずみをつくし(濡標・櫛・筑紫)深き心のしるしばかりぞ(後撰集・一一〇)

22 秋ごとに來れど帰れば頼まめを声にたてつつかり(擬音・仮・雁)とのみなく(後撰集・三六三)

能宣に車のかも(甍)を乞ひにつかはして侍りけるに、

侍らずといひて侍りければ

23 か(鹿)をさして馬といふ人ありければかも(甍・鴨)をもをし(惜し・鴛鴦)と思ふなるべし(拾遺集・五三・藤原仲文)

返し

24 なしといへばをし(惜し・鴛鴦)むかも(かも・甍・鴨)とや思ふらん鹿や馬とぞいふべかりける(拾遺集・五三・能宣)

たびたびのかへり事なかりければ、時鳥のかたを作りて

25 飛びちがふ鳥の翼をいかなれば巢立つなげきにかへ(返・瞬・返事)さざるらん(道綱母集・一六)

26 われをのみ頼むといへばゆくすゑ(行き着く先・将来・末)の松のちぎりもきてこそはみめ(蜻蛉日記・二二・兼家)

山田の中に小鷹狩したる所

27 秋の田と世中をさへわがごとくかり(刈り・仮・狩)にも人はおもふべらなり(貫之集・二二三)

さらに、次の二首は西岡注(7)論文に指摘されている。

28 都いでて今日みか(地名みか(原)・三日・見)の原いづみ河かは風寒し衣かせ山(古今集・四〇八・よみ人知らず)

29 津の国のなには(難波・名には・何は)思はず山しろの

とはあひ見むことをのみこそ（古今集・六九六・よみ人知らず）

三重の掛詞の用例は多いわけではないものの、小町の「花の色は」の歌などを教材に取り上げる際には、掛詞の説明が必須であろう。その際に三重の掛詞をどのように認めるべきか、改めて定義し直す必要があるのではないだろうか。その際、縁語を契機としたり、言葉遊びのように複数の意味を持たせる技法も含めて広義に掛詞として認定すべきではないだろうか。

### 六、まとめ

和歌の文脈構造を明確にすると、同音異義による広義の掛詞が理解しやすい。ただし、序詞との区別が問題として残る。加えて、明確に二つの文脈に分かれるのではなく、③④の「乱れ」「思ひ乱れ」のように文脈が入り込む場合や、⑨のように縁語を形成する修辭としての掛詞もある。

また、「ながめ（物思い・眺め）」「世（世間・男女の仲）」「なく（鳴く・泣く）」「ふる（経る・古る）」など、両方のニュアンスが自然に溶け込んでいる語もあるのではないか。

文脈の重層性よりも言葉に二重三重の意味を持たせることのおもしろさに主眼を置く歌もあることを考えると、「掛詞」「広義の掛詞」「両義・意を兼ねる・言い掛ける・意を込める・意を含む・響かせる」などの使い分けについて、一定の共通

認識が必要だと思われる。

古典文学離れが懸念される昨今の現状において、こうした基礎的な知識について、改めて問い直す必要がある。五文字七文字からなる韻律のリズムや、駄洒落に継承される掛詞の用法に親しむことは、現代から古典文学を切り離さずに、生活の中に伝統文化を再発見することにつながる。古典文学は現代語訳で学べばよいといった風潮に流されず、和歌の表現の面白さを教えることで、日本語の魅力に気づかせ、理解関心を深めることが期待できるのではないだろうか。豊かな言語感覚を養うために、「掛詞」の学習は有効であり、和歌は優れた教材足り得ると考えるのである。

### 注

- (1) 岩波書店 一九四一年
- (2) 国語と国文学 一九七〇年四月
- (3) 中古文学 一九七一年九月
- (4) 東京大学国文学論集 二〇一三年三月
- (5) 西山学報 一九七一年十二月
- (6) 明治書院 一九六〇年
- (7) 愛媛国文研究 一九六三年十二月
- (8) 『古代詩の表現』武蔵野書院 一九八二年
- (9) 国語国文 一九六九年十月
- (10) 国語と国文学 一九八四年五月
- (11) 犬養廉編『古典和歌論叢』一九八八年
- (12) 『古今和歌集研究集成 古今和歌集の生成と本質』風間書

房 二〇〇四年

(13) 国語と国文学 二〇一三年九月

(14) 和泉書院

(15) 国文学 解釈と鑑賞 一九七〇年二月

(16) 群馬県立女子大学紀要 一九八一年三月

(17) 角川書店 一九七五年

(18) 岩波書店 二〇一四年

(19) 講談社 一九九八年

(20) 大手前大学論集 8 二〇〇八年

(21) 笠間書院 二〇一二年(一九五九年版の改定)

(22) 『新日本古典文学大系 後拾遺和歌集』岩波書店 一九九四年

(23) 『後拾遺和歌集 三』講談社学術文庫 一九八三年

(24) 『新日本古典文学大系 拾遺和歌集』岩波書店 一九九〇年

年